

どれだけ深く見つめるか

先日、ホームページを見てくださる地域の方から、「よくそんなに毎日書くことがありますね」と言われました。私は、皆さんと同じ中学生の時には国語が好きで好きな生徒ではありませんでした。好きだったのは英語と数学。したがって、文章を書くのも嫌いでした。そんな私が国語好き、執筆に抵抗がなくなっただのは二人の人物との出会いがきっかけでした。

一人は高校二年まで古典を教えてくださいました。彼は、教科書から離れて古典の世界を実に興味深く語ってくださいました。それから私は、日本の古典、中国の古典が好きになっていきました。「好きこそもの上手なれ」ですね。いったん好きになると、現代文にも興味がわくようになりました。でも、書くことにはまだ興味がもてませんでした。

二人目に出会った人物が私に書くきっかけを与えてくれました。その人物については以前も書きました。左の写真の人物です。そうです、正岡子規です。

彼は二十八歳の時に脊椎カリエスという病気にかかります。結核菌が脊椎（せきつい）に入り込み、脊椎が腐っていく病気です。徐々にからだが動かなくなり、寝たきりになっていきます。まっすぐ立たせることができないので、横からしか写真が撮れません。それが左の写真です。

寝たきりになった彼は、布団から動くことができせん。そんな状態の時に、彼は「病床六尺（びょうしよくしゃく）という随筆集を書きました。「病床」とは病（やま）いで寝ている場所のこと。「六尺」は今の約百八センチメートル。つまり、布団の上で見えるもの、聞こえるもの、感じるものが彼の世界。彼はそれを題にしたのです。

動ける範囲が限られていても、見方次第で書くべき内容はたくさんある。狭い範囲を深く見つめることで、新しい発見が多く見つかる。私は子規からそう学びました。

彼と出会ってから、私は教師になりました。自分で言うのも何ですが、学校生活を見てみると、生徒の素敵な姿にたくさん気付きます。その分心配なことや、早く何とかしなければということにも気付きます。それが文章になるだけです。

新しい発見は、必ずしも行動範囲の広さに比例しません。どれくらい周りを深く見て考えるかだということを、私は子規から学びました。彼は三十四歳の若さでこの世を去っています。到底彼の域には追いつけません。彼の教えてくれたことを大切に

して、これからも書いていこうと思います。

（九月四日 記）

